

学位審査報告書

新制
人
107

氏名	(ふりがな) さとう やすこ 佐藤 泰子
学位(専攻分野)	博士(人間・環境学)
学位記番号	人博 第 434 号
学位授与の日付	平成21年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 人間・環境学専攻
(学位論文題目)	
<p>終末期患者のスピリチュアルペインへの臨床的アプローチ — 「苦しみの構造」に着目して—</p>	
論文調査委員	主査 教授 新宮 一成 副査 教授 岡田 敬司 副査 准教授 永田 素彦

氏名	佐藤 泰子
----	-------

(論文内容の要旨)

本学位申請論文は、人間にとっての根源的な問題である「苦しみ」を主題として取り上げることによって、援助という行為の本質を把握しようとするものである。援助論の根幹を再考するこの目的のために、死を前にした終末期患者が本来的自己に立ち返っている場に立ち会った記録が報告され、「苦しみの構造」という概念が提出され、精神的苦痛へのアプローチが試みられる。

まず序においては、研究の背景と目的とが述べられる。医療や福祉の現場において、患者や利用者が医療者の言葉に傷つくということがしばしばある。これは援助者の思想、あるいは専門職教育と患者や利用者の思いとの間にずれがあるからではないかと感じられる。援助者がクライアントの苦しみを構造的に理解していなければ、援助は的はずれなものになり、それによってクライアントを逆に苦しめることにもなる。苦しみの中にある者は自己の苦しみを構造的に知ること、自己の存在の在り様に意識が差し向けられ、自らその苦しみを緩和する方向を目指しうる。

現在、医療現場にスピリチュアルペインという言葉が登場しており、医療者はそのケアを求められるのであるが、この概念はあいまいに用いられることも多く、本論文では、この語の慎重な用法を探りつつ、この概念を活用しながら終末期患者への援助のあり方が考察されている。

第1章『「苦しみ」の構造解明とスピリチュアルペインへのアプローチ』においては、患者の苦しみに対する構造的な理解を、援助者の立場にある人々に向けて提案している。そのため「苦しみ」の構造解明を試み、さらに、苦しんでいる者が苦しみを自ら緩和していくストラテジーについて考察している。また「問い」、「自明の喪失」、「苦しみの構造」を手がかりとして、スピリチュアルペインの発現の過程を考察し、ケアへのアプローチを試みている。主体は意識の志向性によって対象化された事態に対して、否定と肯定という対時的評価を与え、評価はこの対時のなかを流動するが、否定的事態を生きているときに苦しみがある。スピリチュアルペインは、自明を喪失し否定的評価のなかで「自己の存在と意味を問う」苦しみである。ケアは、その「問い」に答えを用意するとか既成概念に導くというのではなく、動かさない事態を生きる人間のセルフコーピングの力によって自らが「問い」に意味を与えていく道程を支えることであると結論されている。

第2章「終末期患者のスピリチュアリティとは何か—スピリチュアルペイン変容の分析—」では、終末期患者の事例に基づいて、スピリチュアリティの概念を実践場面で再検討している。その事例におけるスピリチュアルペインの経時的変容に見られたものは、「今を生きる」ために「生きている今に意味」を与えることであった。これが、苦しみ緩和のためのコーピングストラテジーとなっていた。苦しみを言語化すると、苦しみの意味(本質)は、主体に対する「問い」として姿を現す。この「問いかけ」に耳を傾けているときに、

主体は自らの「生」を意味づける。すなわち、主体自らが、「生きている今」の生起の場となる。この「生きている今」の生起の場は、現象学で純粹自我と言われるものであると考えられ、この純粹自我の状態がスピリチュアリティであると結論されている。

第3章「終末期患者が見ている世界の現われ方から考察した実存的苦しみ—「遠のき」と「隔たり」による孤独からの解放—」では、目を主体の周囲に転じ、純粹自我にとって世界がどのように現れているのかを考察している。終末期患者の会話記録から、周囲世界の現われとその変化が分析され、実存的苦しみとそこからの解放について、現象学を参照しながらの接近が試みられる。

終末期患者が実存の消滅である「死」を前にしたとき、世界は「遠のき」、主体はそれを「隔たり」の向こう側から孤独のなかで見ていた。こうして閉塞された「今、ここ」から主体は自らを解放するために語り、世界は「～として」と表現されながら、意味を変更しつつ主体の前に現われる。主体の「語り」は、思いを再構成しながら実存を他者と自己に開示させるものである。語ることは、意味を介して死という実存の有限性を受容し自らを苦しみから解放させ「生きる力」の根源にもなりえる重要な役割をもつと論じられる。

第4章『「苦しみの構造」から援助的コミュニケーションへ』では、人はいかに苦しい状態のなかにもそこからの活路を見出そうとするという知見が述べられる。そこには他者の存在が必要であり、そこに介在する行為が「語ること」と「聴くこと」であった。苦しみを構造的に理解する枠組みが提供されることは、援助者の立場にある者にとって重要である。終末期患者においては、「語り」そのものが、動かない事態を生きるという苦しみからの解放の手立てである。

結びでは、「苦しみ」は徹底的に主体だけのものであることが論じられる。主体自らが「苦しみ」をどう生きるか、またどう動かしていくのかに、「苦しみ」の動向は委ねられている。援助者はその道程に同行するのである。その同行は「どこを動かそうとしているのか」、つまり「事態を動かすのか、思いを動かすのか」という構造的な見極めをもって為されなければならない。

氏名	佐藤 泰子
----	-------

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、終末期医療において、患者に心的な援助を与えるにあたり、人間の「苦しみ」への態度に着目することによって、援助という行為の足場と方向性を探究したものである。本論文の特徴は、苦しみに共感しようという呼び掛けのみに終わることなく、どのようにすれば苦しみをより良く理解できるかを考えて、患者の言葉に即して「苦しみの構造」という概念を提出し、実践現場においての指針を提供しようとしているところにある。

著者は、医療の現場における援助の実際を観察し、援助を提供する側の思想と、患者の求めている援助の形との間にずれがあることに着目する。この観察結果が、本学位申請論文の執筆の動機ともなっている。医療側の援助者は、何らかの手技・手段を講じることによって、苦しみの原因である病という事態を動かして行かなければならないという教育を受けている。しかし、患者の側の問いはむしろ、「何がどのように苦しいのか分からない」というところにあると、著者は考える。

それゆえ、患者の「苦しみ」からの問いかけと、それに対する医療者側の応答は噛み合わないことになり、医療者側の技術論的な応答は、場合によっては、患者にとって的外れと感じられたり、時には、心を傷つけるものと感じられることさえある。よって、援助者は、患者の問いがどのような構造に基づいて発せられているのかを踏まえて臨床に臨む必要があり、そうした援助者の理解に依りながら、患者の側は、自己の苦しみのあり方に目を向けていくことができるようになるであろう。このような思想に基づいて、著者は、患者の苦しみの構造を形式化しようとする。

これらの問題設定は、医療現場において、医療的援助の従事者が経験する困難な心理的状況を平易に表現したものであるばかりでなく、受動的に死に向かう事態に直面させられた患者に、感じ方と考え方を含めた「思い」を能動的に変えていく可能性を提供しようとするものとして意義がある。

著者は、「苦しみの構造」には、まず、事態に対する否定的な評価の定着があることを観察し、その基盤には、日常生活で仮定されている自明な次元が病によって失われたことがあると考える。そして、苦しみは、「現在の生の意味や、事態の因果」への問いの構造であることを明らかにする。従来からしばしば言及されてきたように、この問いに対しては、運命や必然性を導入して事態を理解して行こうとする患者の態度が現れる。しかし著者は、こうした運命や必然性という概念が、それ自体として真理であるというのではなく、むしろ患者による「セルフコーピング」の、端的に言えばストラテジーの形であると理解すべきであると捉え、ここに、実際の苦悩に直面した人の能動性が出現していることを認める。この認識を導くにあたり、著者は運命や必然性、あるいは自明性についての哲学的な、とくに現象学的な思想を意欲的に参照し、実践的な必要性に照らして検討している。

著者はさらに、死を前にした患者の内面における、現世と来世の概念の検討に踏み込む。ここでは宗教的な文脈との接点が問題になる。著者は、WHO でスピリチュアリティの概

氏名	佐藤 泰子
----	-------

念が検討の対象となったことに鑑み、来世の表現を患者の思想の中から汲み取ることに努めるが、予め実体化された来世を前提として患者に語ることは慎重に避けている。著者は、覚悟と未練、今が死を待つだけの時間なのかという問い、そして他界と霊魂についての、患者の語りの逐語録を詳細に検討する。そして、著者による傾聴に伴って、これらの主題群に関して、患者の語りが変化して行くありさまを取り出している。来世や霊魂という概念は初めは否定されているが、ほどなく、現在という時間を意味づけるための仮設的な視点として、それらが位置づけられて行くことが、患者の語りの中に認められる。このことは、患者が、現に置かれた事態に対する、自らの「思い」を変化させて行ったということである。これは、援助者がこの語りに寄り添うことによって、初めて知覚可能となった変化である。終末期においてもなお可能な実存的な能動性を、援助者が受け取り、確実なものにして行くことができることが示されている。著者はこれが、医療側の援助者が取り組むべき方向性であることを示唆しているが、この論は、患者の逐語録の巧みな解読と整理によって、説得力をもって展開されている。

著者はまた、なぜ患者が語り援助者が聴くのかという、自らが行っている援助という行為そのものの中で生じてくる疑問を取り上げる。語りは、直接に事態の打開にはつながらない。そうであるにもかかわらず、語り出すという行為がある。このことは、言語による相互理解が、意味的水準以上に、語るという行為そのもの水準で支えられていることを示す。著者は、沈黙もこの語りの中にあるものと捉えて、たとえ患者の沈黙が長くなっても、援助者が「待つ」ことの意義を強調する。

言語的相互理解についての著者の考察は、著者の「実存」についての理解と関係がある。ヤスパースの「実存開明」を引きつつ、著者は、発話したり、発話しなかったりする主体のあり方の中に、その「実存」の、あるいは患者の「存在意義」の発露を読み取ろうとする。そして、問題になっている「苦しみ」は、徹底的に患者自身のものであり、事態を動かそうとする立場からは一種の誤差のようなものにすぎない一人一人の存在は、実存の立場からは全世界であるという逆説に、改めて注意を喚起している。

このように、本学位申請論文は、援助の思想を、現場の実際において、援助と医療のずれという観察、患者の内面の変化の聴取、患者と援助者の言語的交流の本質という重要な各次元において包括的に再検討し、有意義な結論と実践的な提案を導き出しており、人間をその環境との関わりに沿って解明することを目指した人間・環境学研究科の理念に適ったものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成21年1月6日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認められた。